

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

導論 (日本民俗社会の形成と発展：  
イエ・ムラ・ウジの源流を探る. 第一部  
社会人類学的視点：周辺との比較)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5181">http://hdl.handle.net/10502/5181</a>

## 導論

須藤健一

第一部において社会人類学に負わされた課題は、東アジアの四つの民俗社会——日本本土・琉球列島・韓国・中国（漢民族）——の基本的性格に関して、その普遍性と個別性とを明らかにすることである。

このうち普遍性については、第一にこの四つの社会がいずれも農民をその構成主体にしていること、第二に同じく四つの社会がいずれも中国文明、とりわけ儒教的規範の影響を、多少にかかわらず族制のうえに反映していること、以上の二点が共通の特性として指摘されよう。第一の点はともかくとして、問題は第二の点、つまり個々の民俗社会が中国文明を摂取する過程で、どの要素を選択し、どの要素を選択しなかったかということである。それは必然的に次の個別性の問題につながってこよう。

そこで個別性について考えてみると、まず第一に、各民俗社会が中国的要素を受け入れる以前に営んでいた——同時にまた中国的要素の「受け皿」となったと思われる——固有の社会組織はどのような形態であったのか、第二に、中国的要素を受容した後には再編成された各社会は、どのような形態に変貌をとげたのか、以上の二点が、おそらく議論の焦点になるであろう。

いずれにしてもこれらの諸課題に接近するに際しては、社会人類学の現在の手法による分析結果を歴史科学の援けを借りて、史実として裏づけていく手順を疎かにしてはならないだろう。したがって、以下の各セクションでは、社会人類学の立場から提起されるさまざまな推論や仮説に対して、歴史学の観点から忌憚のない批判や意見が開陳されるはずであり、文字どおり、学際的アプローチの効果を發揮していると自負するものである。

さて、本論に入るに先立って、わが国における東アジア民俗社会の既往の研究動向を学史的に一瞥しておくことも、

この際無駄ではあるまい。ごく概括的に見れば、一時代前のこの分野の研究は、主として農村社会学者の手で進められていたが、その一方では一部の法制史家やシノロジストの間で、もっぱら文献に依拠した中国の族制研究が、それなりの実績を挙げていた。いずれにしても当時の一般的傾向として、各民俗社会の研究が、それぞれ個々別々に行なわれ、相互の比較や対比がさほど活発に行なわれなかった点に、ある種の限界があったことは否定しがたい。

ところが一九五〇—六〇年代を境にして、状況は大きく変わった。すなわち第一は、この頃から本格的な社会人類学のトレーニングを受けた若手の研究者たちが、まず琉球民俗社会に目を向け、その新鮮な研究成果を踏まえて、日本本土の伝統的な社会組織を新たな視角から見なおすという動きが、俄然活発になったことである。そして次の段階として、これらの研究者の多くは、積極的に海外にフィールドを求め、台湾・香港・韓国から、さらには東南アジア方面にまで視野を拡大していったわけである。こういう研究動向は、従来ややもすると陥りがちだった局地主義的偏向や独断を大幅に超克する契機を与えたばかりでなく、一個の研究者が複数の民俗社会を比較考察することによって、各社会の特性を、よりいっそう鮮明に浮き彫りにするという二重の効果をもたらしたのであった。

今回のシンポジウムの企画にあたり、われわれがその点に留意して参加者の招請を行なったことはいうまでもない。したがって、第一部において報告および討論を行なった社会人類学者は、ほとんど全員が、日本本土以外にフィールド経験をもつエキスパートであり、以下の各セッションでは、四つの社会を縦横にクロス・オーバーした、核心に迫る議論が展開され、その結果、生み出された新しい知見は、今後この分野の研究に重要な指針を与えるであろうことは疑いをいれない。

ではこれから、家族・親族・村落を中心として、東アジアの民俗社会を本格的に討議するにあたり、ポイントとなる若干の問題について論点を整理し、導論に代えよう。

東アジアの四つの民俗社会において、一応「伝統的家族」とみなし得るものは、それぞれ「イエ」（日本本土）、「チャー」（沖縄）、「チップ」（韓国）、「チャー」（漢民族）などの民俗語彙で指示されるが、「家族」を比較するには、それぞ

れの構成原理と機能とをまず検討する必要がある。その点でまずいえることは、これら四社会の家族が観念的には一系性、とくに父系性を志向する点で共通していることである。しかし、実際の集団編成の局面では、父系出自（ないしは父系血縁）の方式を貫徹する社会と、それを流動的に運用する社会とが識別される。父系出自の規制と並行して重要な指標になるのは、同世代の家族成員の地位である。つまり、兄弟間の序列化ないしは兄弟間の結合と分離の問題である。父系出自および兄弟間の地位をめぐる各社会の性格は家族集団の後継者獲得の方法を比較することによって、その異同が浮かび上がってくる。たとえば、日本の家族は父—長男を継承ラインとして優先しながらも、婿養子、両貰い養子をも許容する点で、時には父系血縁だけでなく、血縁関係そのものさえも顧慮しないイデオロギーのもとに成り立っている。

それに対して中国と韓国では、異姓不養の観念にもとづき、家族集団をあくまでも父系血縁で存続させることを希求しており、沖縄本島の南部でもその傾向が顕著である。家族の構成原理に見られるこのような血縁観の違いは家族集団の機能の局面にも顕在化している。すなわち、家産の相続ないし分与における、長（男）子相続、兄弟不均等相続、均分相続や祖先の祭祀権の継承などの機能的側面においても、四社会はかなりの多様性を示している。この多様性は、団体的集団 (corporate group) としての家族の構造上の差異にもとづくものである。

次に、親族組織の比較研究における問題点を取り上げてみよう。右の団体的集団という概念は、社会人類学では第一義的には、生産手段（土地、物的財）を共有する出自集団を意味する。また時として祖先や宗教的対象物（廟、墓地、小祀など）およびその祭祀を共有するところの、排他的な出自集団を指すのにも援用される。したがって団体的集団を構成する出自集団の統合のレベルは、個々の民俗社会によって、クラン (clan)、あるいはリニージ (lineage)、もしくは家族というように、種々様々である。この団体的出自集団の規模を指標として、四つの民俗社会について親族集団の編成の様態を比較すると、日本のイエはもっともサイズの小さい単位集団であり、かつその自律性が高いことを特徴としている。イエは各世代において一子残留の方式をとるため、二、三男および娘は他出ないし婚出し、同時に

彼らの生家に対する成員権は放棄される。そして、イエからの排出者と生家の祖先との系譜関係も漸時消滅していくのが普通である。したがって、このような系譜観念のもとでは、祖先を共同で祭祀する親族集団（出自集団）は、その成立基盤をもっていないことになる。

また場合によっては、奉公人などの非血縁者を構成員となし得る日本の「同族」は、その成員権の獲得方法において、個人の出自が必ずしも資格認定の基準になっておらず、厳密な意味では「出自集団」の構造を備えているとはいえない。

他方、中国の宗族や韓国の門中は、姓を同じくし、族譜や墓地、祖廟、さらには財（族産）をも共有する父系血縁者によって構成されている。そして、これらの出自集団は、同姓不婚の規範に端的に示されているように、族外婚の単位としても機能している。沖繩においても、外婚規制こそ伴わないが、墓のないし家譜を共有する父系出自集団、すなわち「門中」が形成されている。こう見てくると結局、日本本土の伝統的家族には、イエのレベルを超えて、より大規模な（父系）出自集団へと発展する素地がないことになる。

以上のとおり、祖先との何らかのつながりを希求するイデオロギーにおいては、四社会すべてに共通しているものの、父系血縁の原理を親族集団や系譜の編成、あるいは族籍認定の基礎におかない日本本土と、父系血縁の原理にもとづいて世代深度の深い出自集団を形成する中国漢人社会、韓国、沖繩との間には、親族組織に関しても大きな乖離が認められる。このような乖離は、日本本土と他の三社会との対比だけではなく、三社会相互の間でも、族制のさまざまな側面に顕在化する可能性を秘めている。したがって、このシンポジウムにおいては、東アジアの四つの民俗社会における家族・親族の構成原理と機能の異同を明らかにすることが、最重要課題であろう。

最後に、村落について一言述べておこう。ここではまず、村落の統合様式の比較がポイントになろう。そのさいに具体的指標となるのは、政治社会的局面における階層性、経済面での共有財産（入会地、水資源など）、そして村落の統合を志向する各種の象徴（神社、聖域、廟、およびその祭祀組織）などであろう。他方、日本本土における同族制村落

と講組的村落のような村落の類型化が、他の三地域においても成り立つかどうかも検討に値しよう。いずれにしても右のような村落の組織形態は、家族・親族のそれにもまして、各時代の政治的権力の介入に左右されやすいので、その性格の分析には歴史学的検証が不可欠である。また、今回は予備的な問題提起にとどまったが、生態学的視点から、海村・山村と一般農業村落との関わりあいの考察も今後の重要な課題となろう。

(参考文献)

- 江守五夫『日本村落社会の構造』、弘文堂、東京、一九七六  
FREEDMAN, M., 1958, *Lineage Organization in Southern China*, London: Athlone Press.  
蒲生正男「日本の伝統的家族の一考察」『民族学からみた日本——岡正雄教授古稀記念論文集——』、河出書房新社、東京、四九—七六頁、一九七〇  
比嘉政夫『沖縄の門中と村落祭祀』、三一書房、東京、一九八三  
松園万亀雄「沖縄の位牌祭祀その他の慣行にみられる祖先観と血縁観について」『古野清人教授古稀記念論文集・現代諸民族の宗教と文化——社会人類学的研究』、社会思想社、東京、二六九—二九六頁、一九七二  
村武精一「神・共同体・豊穰——沖縄民俗論——」、未来社、東京、一九七五  
中根千枝『家族の構造——社会人類学的分析——』、東京大学出版会、東京、一九七〇  
——「沖縄・本土・中国・朝鮮の同族・門中の比較」日本民族学会編『沖縄の民族学的研究——民俗社会と世界像——』、民族学振興会、東京、二七三—三〇二頁、一九七三  
中根千枝編『韓国農村の家族と祭儀』、東京大学出版会、東京、一九七三  
李光奎『韓国家族の構造分析』（服部民夫訳）、国書刊行会、東京、一九七五  
清水昭俊「出自論の最前線」『社会人類学年報』一一卷、弘文堂、東京、一—三四頁、一九八五<sup>a</sup>

——「日本の家」『民族学研究』五〇巻一号、九七一—一〇頁、一九八五b  
渡辺欣雄『沖縄の社会組織と世界観』、新泉社、東京、一九八五  
山路勝彦『家族の社会学』、世界思想社、京都、一九八一